



除草機の発達、一台付きより二台つきへ 田村山にて

地方ではさなぶりといっているが、ここでのさなぶりは高田伊佐須美神社のお田植祭をさなぶり、その翌日をさなぶりといっている。さは田の神で、田植を無事終ってお帰りになるという意らしいことは、民俗学の発達により、各地の資料を対比して、ほぼ定説になっている。

7、田の草とり もとは素手で掻きとっていたが、やや固い田圃にはがん爪という、掻き取る道具ができた。つぎはころばしの発明である。これにも種々な改良が加えられて今に至っている。除草菜などの発明が、この難渋な田の草取りの労働から農民を解放しようとしている。そして農薬に傷めつけられて、魚類などが小堀から姿を消し始めているのも、一

つの近代農業の異変からきている。

8、稲刈り 刈取る鎌にも変化があり、鋸鎌などになったのは後のことである。乾燥の方法にも変化がある。この地方では三ば立てといって、刈ったら穂を上にして、三ばを組合せて立て、乾けば、今度は穂を内側にしておんにかけるのが、現在も殆ど行なっている慣行である。穂を下にして、何ばも組合せる地方が、福島県の中通り地方などにもあり、決して



田村山付近のさんばだてとほんに (41.10.16写す)